

第 **1** 章

学習基本調査の結果から
みえること

樋田大二郎



小学生の学習と学力が変わった

小学生版の学習基本調査の結果は、エキサイティングである。小学生の学習行動と学習意識が格段に向上したのである。調査結果は、文部科学省（以下、文科省）・現場教員をはじめとした教育関係者の教育方針や教育政策の変革、そして創造的な努力が子どもの学習を明確に変化させたことを示しているのである。

これから、子どもたちの学習のエキサイティングな変化を「『確かな学力』は浸透したか」「理数系離れは克服されたか」「家庭学習は向上したか」の3つの観点から紹介したい。

1. 「確かな学力」は浸透したか

①「確かな学力」とは

今日の学校教育に強く影響している学力観は大きく3つある。

まず、1970年代の詰め込み主義が落ちこぼれ・少年非行・校内暴力などの教育問題・社会問題を招いたことへの反省から生まれたのが「新しい学力観」(1987年)である。関心・意欲・態度の強調と自ら学ぶ意欲と社会変化に主体的に対応できる能力の強調が特徴である。

この「新しい学力観」をさらに展開したものが「生きる力」(1996年)である。心の教育や身体の教育にまで踏み込んだのが特徴である。

これらの学力観は文科省が教育課程審議会や中央教育審議会にて提案してきたものであり、まとめて「ゆとり路線」と呼ばれることもある。しかし、文科省の「ゆとり路線」は、大きな障害に出合う。子どもの自主性の過度な尊重による教育指導の後退、および学力低下への懸念である。

文科省はマスコミをあげての教師批判と学力低下批判の高まりのなかで、「ゆとり路線」を守るために「確かな学力」の学力観を提案

した。この「確かな学力」は『学びのすすめ』(2002年)の中で提案され、今、日本の学校教育を方向づけているのはまさにこの学力観である。その特徴は、学力低下批判論者が唱える学問中心主義や勤勉主義を一定程度まで取り込みつつ、「ゆとり路線」の中核にある経験主義や児童中心主義を守ろうとしていることである。いわば新旧両立的ないしは新旧融合的な学力観である(表1-1)。

②『学びのすすめ』の学力観と第4回調査の結果

『学びのすすめ』が提案する「確かな学力」は、上述のように、学力低下批判への対応と、子どもへの過度の自主性の尊重(≒教師の受け身的、放任主義的傾向)の修正の試みであるとみることができる。「ゆとり路線」を守り通そうとした文科省の苦肉の策とみることができる。そしてそのような背景から『学びのすすめ』は、なによりもまずきめ細かな指導(=教師の積極的な指導)を求めている。さらに、旧来の指導の原理である「勤勉主義+教科書(学問)中心主義」と、古くて新しい指導原理である「経験主義+児童中心主義」[※]の

※経験主義や児童中心主義の考え方は、戦後の一時期(社会科の創設の頃)の日本の教育を方向づけた原理でもある。

両立をはかろうとしていることにその特徴を見出すことができる。

文科省ウェブサイトから、「確かな学力」を育てるための具体的な提案をみると、新旧

両原理の両立を目指すという特徴が、「きめ細かな指導」「基礎・基本」「学ぶ習慣」「自ら学び自ら考える力」などといった言葉の混在で表現されている。

表1-1 3つの学力観

	新しい学力観	生きる力	確かな学力
特徴	○学力の関心・意欲・態度の面を強調 ○自ら学ぶ意欲と社会変化に主体的に対応できる能力	○自主性・主体性に加えて、心の教育や身体の教育にまで踏み込んだのが特徴	○きめ細かな教育指導を奨励 ○系統主義・勤勉主義と経験主義・児童中心主義の両立
文部科学省(文部省)の文書(答申・提言)	「これからの学校教育は、生涯学習の基盤を培うものとして、自ら学ぶ意欲と社会の変化に主体的に対応できる能力の育成を重視する必要がある」 「発達段階に応じて必要な知識や技能を身に付けさせることを通して、思考力、判断力、表現力などの能力の育成を学校教育の基本に据えなければならない」(昭和62年12月教育課程審議会答申)	「いかに社会が変化しようと、自分で課題を見つけ、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、行動し、よりよく問題を解決する資質や能力であり、また、自らを律しつつ、他人とともに協調し、他人を思いやる心や感動する心など、豊かな人間性である……たくましく生きるための健康や体力が不可欠であることは言うまでもない」 (中央教育審議会第1次答申「21世紀を展望した我が国の教育のあり方について」平成8年7月)	「児童生徒が主体的、創造的に生きていくため、一人一人の児童生徒に『確かな学力』を身に付けることが重要となると考えます」 「教育内容の厳選を図った上で、繰り返し指導や体験的・問題解決的な学習などのきめ細かな教育活動を展開することによって、そのねらいを実現しようとしているところです」 (『学びのすすめ』平成14年1月)
備考	上記教育課程審議会答申を受けて、平成3年指導要録改訂では、自ら学ぶ意欲や思考力、判断力、表現力などの育成に重点を置いた。		マスコミから、学力低下や学習時間の減少を批判され、また、現場での過度の子どもの自主性尊重の改善を目指して、文科省は『学びのすすめ』(平成14年1月)を発表。

小学生版の学習基本調査には、表1-2の文科省提案に対応する学習行動や学習意識をたずねる質問項目が多数含まれている。それらの質問への回答傾向を要約したものが、次に示す表1-3である。この表をもとに、文科省の提案と小学生の学習の変化との関係を見てみよう。なお、この表の元になるデータは、本報告書の関連する項目の分析を参照さ

2. 理数系離れは克服されたか —理数系回帰の傾向は見い出されるか

理数系離れの問題は、科学技術立国を目指すわが国にとって、非常に切実な問題である。天然資源が少ない日本では、ヒューマン・ポテンシャルティー、ヒューマン・リソースに頼らざるを得ない。また、1985年のプラザ合意以降の円高誘導により、安い労働力を求めて工場の海外移転が起り、製造業の空洞化を招いたことはよく知られている。このような状況のなかでは、日本は高度な科学技術によって、国内の産業を守らなければならない。これが科学技術立国論である。

しかし、残念なことに、学校教育を巡る状況を見ると、科学技術への期待が高まっているにもかかわらず、それに反して、いわゆる理数系離れが進んでいる。具体的には理数系の教科嫌い、理数系授業の理解度低下などが進行している。

このため、文科省は「科学技術・理科大好きプラン」と称する理数系回帰を目指した一連のプログラムを実施している。

その成果があったのか、あるいは「確かな学力」が理数系に有利に功を奏したのか、今回の調査結果は、理数系を好きな割合が高まっていること、および理数系の授業理解度が高まっていることの2つの点において、小学校では理数系離れに歯止めがかかったことを示している（詳細なデータは第2章参照）。

りたい。

この表をみると、ほとんどの調査項目で、子どもの学習行動や学習意識は「確かな学力」が求める方向へと改善していることがわかる。すなわち、小学校段階では、文科省のいう「確かな学力」に対応する学習行動と学習意識が広まりつつある。

① 理数系教科が好きな割合が第1位と第2位

国算社理のそれぞれについて、小学生の好き嫌いをみると、第1回では、①「理科」71.4%（「とても好き」と「まあ好き」の合計、以下同）、②「国語」52.2%、③「算数」51.8%、④「社会」50.9%であったのが、第4回では、①「理科」68.5%、②「算数」62.8%、③「国語」53.4%、④「社会」48.0%となっており、4教科の好き嫌いの比較をみると、「算数」の躍進によって、「理科」と「算数」が「国語」と「社会」をひきはなしている。

② 理数系の授業理解度が高まっている

また、授業の理解度をみると、理解している割合が高いほうから順に、第1回では、①「理科」70.5%（「ほとんどわかっている」と「だいたいわかっている」の合計、以下同）、②「国語」62.9%、③「算数」62.4%、④「社会」54.5%であった。これに対して、第4回では、①「理科」77.0%、②「算数」73.9%、③「国語」70.8%、④「社会」64.3%という結果であった。このように順位でみても、理数系優位になりつつあるといえる。それだけでなく、第1回から第4回への変化をみると、4教科とも理解度が高まっているが、「算数」が11.5ポイントともっとも大きくなっており、「理科」も6ポイント以上増加している。

理数系の理解度が向上しつつあるとみることができる。

③ 理数系回帰の背景に、学習からの感動と興味がある

「学習していて感じること」をたずねた結果では、理科に感動している（「生き物や自然を『すばらしい』とか『ふしぎだな』と感じる」）割合が80.6%と非常に高い。算数を学習していて感動する（「算数の考え方や解

き方を『すばらしい』とか『ふしぎだな』と感じる」）割合も60.5%であった。さらに、時系列でみるとこの質問項目がはじめて取り入れられた10年前の第2回との比較では、理科と算数において、「感動」（すばらしい、ふしぎと感じる）・「興味」（好きという気持ち）ともに変化が大きい。理科の感動は8割強で高止まりし、理科への興味は7.4ポイントの大幅増。算数についても、感動が5.2ポイント、興味が4.3ポイント増加した。

表1-2 確かな学力を育てる工夫（文部科学省ウェブサイトより）

- きめ細かな指導で、基礎・基本や自ら学び自ら考える力を身に付ける
- 発展的な学習で、一人一人の個性等に応じて子どもの力をより伸ばす
- 学ぶことの楽しさを体験させ、学習意欲を高める
- 学びの機会を充実し、学ぶ習慣を身に付ける
- 確かな学力の向上のための特色ある学校づくりを推進する

注) http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/14/01/020107.htm

表1-3 「確かな学力」の要素と今回調査結果

「確かな学力」の要素	質問項目	結果
基礎・基本	・学力調査の成績 ・授業の理解度	(2007年夏頃の予定) ○
自ら学び自ら考える力	・学力調査の成績 ・家庭での自主的な学習の様子 ・学校での主体的な学習方法の好き嫌い	(2007年夏頃の予定) ○ △
学ぶことの楽しさ	・教科の好き嫌い ・ふしぎさを感じる・興味を持つ	○ ○△
学習意欲を高める	・授業中の様子（動機づけ） ・家での勉強の様子 ・新学力観的興味	○ ○ ○△
学ぶ習慣を身に付ける	・授業中の態度、逸脱行為 ・家庭での学習の様子	○ ○
学習量	・学習時間	○

注1) ○印は今回調査で児童の態度や行動が改善された項目。

△印は変化の少ないもの、もしくは、個々の項目によって改善の程度が異なるもの。

注2) 「確かな学力」の要素は http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/14/01/020107.htmより

3. 家庭学習は向上したか

最後に、すでに小学生の学習行動と学習意識が向上していることを論じたが、その中で簡単に触れるにとどまった家庭学習について焦点をあて、家庭学習の量と質が向上したことを指摘したい。

① 家庭での学習時間は増加傾向にある

第1回から第3回まで減り続けてきた家庭での学習時間が今回増加に転じた。第3回と第4回を比べると、家で「30分未満」しか勉強しない小学生の割合が第3回の約4割から第4回の3割強へ1割ほど減少した。平均でも、家庭学習時間は第3回の71.5分から第4回の81.5分へ10.0分の増加となっている。

② 宿題が小学生の家庭学習を向上させている

小学生は毎日宿題を着実にやっているようだ。宿題をしている時間をみると、「ほとんどしない」はわずか4.1%、20人に1人以下の割合である。「15分」も23.3%、これらの合計は27.4%。4分の1をようやく超えるにすぎない。「30分」がもっとも多く35.9%、それ以上では「45分」が15.6%、「1時間」が13.9%などとなっている。また「45分以上」宿題をしている小学生は35.4%とおよそ3分の1に達している。

③ 家庭学習の質が向上した

家庭学習では、基本的な学習習慣が身につくとともに、自主性や計画性、そして意欲・態度の面で向上がみられた。

以下、詳細なデータの提示は第2章で行うこととして、大まかな傾向を紹介する。

まず、家庭での学習状況をみると、第1回と比べて「出された宿題をきちんとやっていく」「嫌いな科目の勉強も一生懸命する」などの基本的な学習習慣が向上している。

このほか、「家族に言われなくても自分から進んで勉強する」「計画を立てて勉強する」などの自主性や計画性も向上している。このことは「ほとんど毎日、親は私に『勉強しなさい』と言う」の減少にもつながっている。

さらに「授業で習ったことを、自分でもっと詳しく調べる」と答える小学生が増えている。またわずかであるが、「自分で興味を持ったことを、学校の勉強に関係なく調べる」が増加傾向にある。興味関心からの自主的な家庭学習の姿勢も向上しており、「確かな学力」が家庭学習においても身につけてきているとみることができる。

以上、学習基本調査小学生版は、小学生の学習行動と学習意識が大きく向上したことを明らかにしている。まず、学習行動と意識の面で「確かな学力」が目標としたような状況が出現しつつある。『学びのすすめ』の効果があった可能性を強く示唆している結果といえよう。

また、理数系離れに歯止めがかかった可能性も強く示唆されている。「算数」が好きな割合と「理科」「算数」の理解度が向上している。

最後に、家庭学習も量と質の両面ともに向上した。

全体を通して、小学生の学習については、近年の社会をあげての学習向上の取り組みが功を奏してきたといえるのではないだろうか。

第2章

小学生の学習に関する 意識・実態

邵 勤風 (1節1項)
鈴木 尚子 (1節2項)
宮本 幸子 (1節2項)
樋田大二郎 (1節3項、2節2・3・6項)
木村 治生 (1節4項)
十河 直幸 (2節1項)
諸田 裕子 (2節4・5項)

